

ワークショップ

座長：岡村 菊夫（東名古屋病院）

寛 善行（香川大学）

■ 泌尿器科診療における漢方診療に関する 多施設アンケート

香川大学 医学部 泌尿器科

加藤 琢磨、尾崎 悠、内藤 宏仁、松岡 祐貴
宮内 康行、田島 基史、田岡 利宜也、常森 寛行
上田 修史、杉元 幹史、寛 善行

【目的】

泌尿器科診療における漢方診療の現況と今後の展望に関する意識調査を目的に、東洋医学の知識の取得状況、漢方薬に対する処方内容についてアンケート調査を行った。

【方法】

全国の大学附属病院 87施設、1343人にアンケートを送付した。アンケートの主な内容は泌尿器科医師経験年数、性別、専門領域、東洋医学教育の経験、情報ソース、漢方診療に対する意識調査、適応疾患、頻用する漢方薬とした。無記名にて匿名化し、計20個の質問に対して単回答あるいは複数回答にて回答を求めた。

【結果】

77施設より計926件の回答があり、アンケートの回収率は68%であった。各年代よりほぼ均等に回答が得られたが、男性医師が9割を占めていた。専攻分野は腫瘍が最も多く、ついで泌尿器科一般、排尿障害、腎不全、尿路結石の順であった。情報のソースは製薬会社の訪問、雑誌・書籍、企業主催のセミナーの順に多く、大学教育は最も少ない回答項目であった。

45.7%の医師が医学生時代に東洋医学の講義・実習を受けたことがあると回答していたが、所属施設の東洋医学への取り込みを「積極的」あるいは「やや積極的」と感じる泌尿器科医は24.7%にとどまった。

漢方薬についてのイメージでは「西洋医学と異なった良さがある」、「近年はエビデンスが蓄積している」といった肯定的な回答が多い一方で、「非科学的である」とする回答も少なからず見られた。

漢方に「興味がある」、漢方を「活用しようと思う」と多数の泌尿器科医が関心を示し、7割以上の医師が月に数回以上漢方薬を処方しているものの、7割の医師は漢方を「わかりにくい」と感じていた。漢方薬を処方しない理由として最も多かったのは「使い方がわからない」、「エビデンスが不足している」であった。実際に「証」に基づいて漢方の処方をおこなっているのは2割程度の医師であった。漢方薬は「治療の選択肢が広がる」、「効果が期待できる」といった肯定的な理由で処方されている一方で、「他に効果的な治療法がない」「以前の医師の処方を引き継いで」といった消極的な理由で処方されていた。

過半数の泌尿器科医は将来の漢方薬の需要を「現状と同じ」ととらえており、「漢方医学の重要性が増していく」と答えた医師は全体の4割であった。

【結語】

多くの泌尿器科医師が漢方薬に関心を示し、漢方薬は治療選択肢の一つとして汎用されていた。しかしながら、漢方薬に対しては難解なイメージがあり、本来根拠となるべき東洋医学的な診断法ではなく、診断病名に基づき漢方薬は処方されていた。泌尿器科領域の東洋医学の普及、発展のためには所属施設が東洋医学を積極的に活用する姿勢を示し、泌尿器科医師の教育機会の増加が必要と考えられた。